第824号 平成26年1月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2014年（平成26年）
1月号（No. 824）
公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
会員の会報購読料は年会費に含まれています
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

プラハ国際アルピニズム・フェスティバル開催

中村　保

昨年11月、チェコのプラハにおいて、第20回「プラハ国際アルピニズム・フェスティバル」が開催された。テーマは「日本山岳会と日本の登山と探検」。その模様を、中村保会員がレポートする。

山岳行事が目白押しとなるヨーロッパの冬

ヨーロッパでは、11月から12月にかけての登山の端境期、多くの山岳行事が開催されます。

昨年は、英国でNPO活動「コミュニティー・アクション・ネパール」を主宰する「執念の登山家」ダグ・スコットが音頭をとって「ヒマラヤ一番乗り(First in Himaraya)」のシンポジウムが、11月19日(ロンドン)、20日（オックスフォード）、21日(ダービー)の3日間にわたり開催されました。

入場料は、終日チケットで30ポンドと決して安くはありませんでしたが、講師にはダグ・スコット、サービス精神旺盛なクルト・ディームベルガー、アルパインクラブ会長のミック・ファウラーなど多彩な顔ぶれ。さらに異色はクルトの娘さんで、ケンブリッジ大学で研究をしているチベット学者のヒルデガルドさん。また、2013年の「ピオレドール（黄金のピッケル賞）」受賞者、ナンガ・パルバットの長大なマセノ・リッジを初登攀したサンディ・アランの名前もありました。

さらにポーランドのウッズでは、11月6～9日に「国際探検家フェスティバル」が、ブルガリアでは11月20～23日に東ヨーロッパ最大のスキーリゾートでの「バンスコ・フィルム・フェスティバル」が、例年どおり開かれています。

また、スイスでも様々なイベントがありました。世界初の山岳会として知られる英国のアルパインクラブが発足して6年後の1963年に「スイス山岳会」が誕生したわけですが、その創立150周年目にあたる13年は、様々な祝賀イベントが行なわれています（本紙13年11月号参照）。

第20回「プラハ国際アルピニズム・フェスティバル」開催

そしてチェコのプラハでは、13年11月21～24日の4日間、第20回「プラハ国際アルピニズム・フェスティバル」が開催され、約270人の来場がありました。大物スターがいなかったせいか前年の3000人よりは若干低調でしたが、ヨーロッパ最大の山岳フェスティバルであることに変わりはありません。

何故チェコなのか。これはオーストリアの影響です。来訪者はオーストリア人が多く、会場にはチロル地方の大きなブースがあり、スポンサーの一翼を受け持っています。クルト・ディームベルガー、ピーター・ハーベラーはオースリア人で、ラインホルト・メスナーはイタリアですが南チロル出身です。中欧の複雑な歴史の中でオーストリアとドイツの影響を強く受けて

目　次

プラハ国際アルピニズム・フェスティバル開催‥ 1
第29回全国支部懇談会　静岡大会の報告‥ 4
第50回学生部マラソン大会　‥ 5
「山の日」制定運動が正念場　拡大新組織で祝日実現へ‥ 6
日本山岳協会・東京都山岳連盟との新たな関係について‥ 8
第45回　新入会員オリエンテーション開催‥ 9
東西南北‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 10
　岡野金次郎と顕彰碑――日本山岳会創立の導火線となった先駆者
支部だより‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 11
　千葉支部／東九州支部
活動報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 12
　資料映像委員会／緑爽会
Climbing&Medicine・60 ‥‥‥ 13
図書紹介‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 14
図書受入報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
会務報告‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 16
ルーム日誌‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
会員異動‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 17
新入会員‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 18
INFORMATION ‥‥‥‥‥‥ 18
日本山岳会所蔵資料紹介 No.9‥ 19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木‥‥‥‥‥‥‥10～20時
水・金‥‥‥‥‥‥‥‥‥13～20時
第2、第4土曜日‥‥‥‥‥‥閉室
第1、第3、第5土曜日‥‥10～18時

きました。第1次大戦後オーストリア・ハンガリー帝国が崩壊、チェコスロバキア共和国が誕生、93年にチェコとスロバキアは平和的に分離し今日に至っています。

4日間のプレゼンテーションは、大変充実していました。個人の発表の前に、アルピニズム・フォーラムとしてヨーロッパ・アルプスでのヘリコプターによる遭難救助が詳しく紹介され勉強になりました。

続いて、ハイライトとも言うべき8000メートル峰14座完登オーストリア人女性クライマーのガリンダ・カールセンブラウナー、イタリアのアイス・クライミングの旗手（女性）、フリークライミングの世界的第一人者であるチェコのアダム・オンドラ、スキー・アルピニストで8000メートル峰からの滑降に挑むベネディック・ボーン、毎年ネパール・ヒマラヤの宣伝に努めるアン・ツェリン・シェルパ父子などが登場し、実に豪華な顔ぶれ。キャスティングの苦労が窺える気がしました。

なお、この場での再会を楽しみにしていたピーター・ハーベラーは、ブルガリアのバンスコ・フィルム・フェスティバルに行っていて会えないのが残念でした。

今回のテーマは「日本山岳会と日本の登山と探検」

私がプラハ国際アルピニズム・フェスティバルに招待されるのは、11年に次いで2度目です。前回は「最後の辺境―チベットのアルプス」がテーマでしたが、今回は「日本山岳会と日本の登山と探検」でした。

主催者から依頼されて、日本人メンバーとしてもう一人、ネパールのキャシャール（6770メートル）サウス・ピラーを初登攀してピオレドールを受賞した花谷泰広・馬目弘仁・青木達哉の3人組から、青木さんを招聘する手引きをしました。

日本山岳会が、海外の山岳イベントで紹介されたのは初めてでしょう。創設とウェストン、宗教登山、槇有恒のアイガー東山稜とカナダのアルバータ、大学山岳部の活躍、ナンダコットとマナスル、エベレスト三国登山、女性登山家、皇室と日本山岳会、日本のヒマラヤ登山、河口慧海のチベット潜入・大谷光瑞の中央アジア行・千島踏査、南極探検と昭和基地、英文ジャーナル（Japanese Alpine News）、ピオレドールと日本人クライマーなど28枚のスライドを使って説明しました。

各国からの発表。写真はネパール

日本人クライマーは、これまでに4回、ピオレドールを受賞しています。09年には、第17次の平出和也・谷口けいのカメット（7769メートル）南壁初登攀（08年）が受賞。これはダグ・スコットが絶賛しました。また同じ年に、佐藤裕介・一村文隆・天野和明らによるカランカ（6931メートル）北壁のアルパイン・スタイルによる初登攀（08年）が受賞しています。

さらに11年には、第19次の横山勝丘・岡田康のローガン東峰（約5900メートル）東南壁初登攀（10年）、そして13年には第21次のキャシャール（12年）が受賞しています。これら4隊とも、日本山岳会が海外遠征助成金を出し、貢献してきました。

ヨーロッパ登山界で日本のクライマーといえば「ギリギリ・ボーイズ」だけが知られ、注目されています。常々感じてきたことですが、日本の存在感の薄いことです。私は03年から13年までに、13カ国28回の海外講演をしてきましたが、私以外の日本人が招待されたのは今回が初めてです。いかに日本の登山家が、海外への発信を怠ってきたかの証左です。

惜しむらくは、日本のヒマラヤ黄金時代の詳しい記録が発信されてこなかったことです。

図書の寄贈とアン・ツェリンさんのこと

フェスティバルが終わった後、主催者アルピ社（山岳雑誌、登山用品）社長のラディスラブ・ジラスコさんの配慮で、アン・ツェリンさんと日本人2人を、チェコの景勝地、プラハの北約100キロにあるボヘミアン・パラダイスに連れていってもらいました。長閑な田園の縁に、砂岩の岩稜とピナクル（ロック・タウン）が点在し、教会、古城がマッチして独特の美しい景観を

つくっています。クライマーの岩登りのゲレンデです。周辺の丘陵はスキー場です。11月末で寒かったけれども、楽しい休日でした。

このとき、ジラスコ氏より立派な写真集をいただいたので、日本山岳会の図書室に寄贈します。

近年、海外とのコンタクトが増えるに伴い、ときおり書籍が送られてきますので、ほとんど図書室に寄贈しています。なかにはオーストラリアの南極探検の第一人者、ダミアン・ギルエアの『南極の登山』（Mountaineering in ANTARCTICA Climbing in Frozen South）のような大変貴重な一冊もあります。ダミアンはアメリカン・アルパイン・ジャーナルの南極情報担当でもあります。余談ですが、チェコのビールはヨーロッパで一番旨いと思います。

景勝地に同行した、日本でもお馴染みのアン・ツェリン・シェルパさんは、ネパール山岳協会の元会長で、アジアン・トレッキング社ほかいくつかの会社を経営、次男のダワ・シェルパさんとともに外国へのアンバサダー的な役割を果たしています。13年はエベレストのダイヤモンド・ジュビリー（60周年）の行事が英国とネパールで行なわれました。14年はチョー・オユー、15年はカンチェンジュンガとマカルー、16年がマナスルのダイヤモンド・ジュビリーです。

アン・ツェリンさんは16年の5月9日（マナスル初登頂日）をはさんで記念行事をしたい、第3次マナスル登山隊の存命の方々を招待したいと言っています。大塚博美さんと松田雄一さんにその旨伝えてあります。

筆者から、日本の近代登山について発表

アメリカの山岳誌について

チェコもポーランドも山岳誌は充実していますが、読めないのが残念です。私自身は言葉の問題で山岳情報は英語圏とスペイン語圏からの発信に頼らざるを得ません。基本はアメリカ山岳会のアメリカン・アルパイン・ジャーナル（AAJ）と英国のアルパイン・ジャーナル（AJ）です。伝統とスタイルを守りつつ進化しています。

「AAJ」は昨年、編集長がジョン・ハーリンⅢからベテランのドゥガルド・マクドナルドに代りましたが、英国の山岳ジャーナリストの第一人者、リンゼイ・グリフィンが共同編集人として参画しています。世界の登山記録に最も精通しているリンゼイがAAJの登攀遠征記録の情報を収集し、質を維持しています。13年号からオール・カラー化を実施しました。アメリカ山岳会は会員サービスに経営資源を集中するため、外販を止めてしまったことは会員以外に不便をかけています。

山岳会としての最優先プロジェクトは「IT化」です。創刊号からすべてデジタル化されていて、アクセスできます。クライミング情報も、「AAJ・E-ニュース」で配信されています。会員名簿もデジタル化してあり、ペーパーの名簿はありません。

「AJ」も、14年号よりスティーブン・グッドウィンからベルナード・ニューマンに編集長が代ります。編集長はボランティアですが、オノラリー・エディターとして名誉あるポジションに位置づけられています。アルパイン・クラブも今までの記録のデジタル化を進めており、そのために寄稿者からいちいち了解を取り付けています。英国人らしい注意深さです。

アルパイン・クラブの生みの親である王立地理学協会の広範な活動は、刺激になります。08年に東チベット探査・発見で「バスク・メダル」を受賞してフェローになっていますので、4半期ごとにブレティンが届きます。

14年春号に13年ランドローバー奨励金を受賞した「最極寒の地へ（Pole of Cold-Living in extreme cold environments）」のプロジェクトが載っています。ロンドンを11月に発って、シベリアの人間が棲む、世界で一番寒い土地マイナス70℃のオイミャコンまで3万キロメートルを3カ月かけて踏破しました。英国人らしいスピリットとチャレンジです。

今年、傘寿を祝う老年探検家を鼓舞してくれます。

Reports

第29回全国支部懇談会　静岡大会の報告

静岡支部長　大島康弘

昨年10月20日、静岡支部主催により静岡駅前「ホテルアソシア」を会場に、25支部190名の会員が一堂に集合し、交流を楽しんだ。

会場には、私設ピッケル博物館を営む諏訪部会員の200点に及ぶ収集品のうち、山之内1号、門田の初期の特殊鋼製、ベントなど24点の貴重なピッケル。富士山登頂回数を競う實川、有元両会員の様々なアングルで捉えた富士山の写真をはじめ、他の支部会員の作品などが展示され会場を飾った。

支部懇談会の講演会場風景

講演会に先立ち、田辺静岡市長から歓迎の挨拶をいただき、杉山文化観光部理事に富士山の世界文化遺産指定に至る経緯を伺った。

講演会には、2人の当支部会員が登壇。長田永年会員は「日本山岳会の今昔」と題して、また、アシスタントの厚見会員がパネルなどを掲げつつ、静岡支部の歴史や様々な先輩との交流のエピソードを、持ち前のユーモアを交えて軽快な口調で紹介された。

安間元支部長は「富士山におけるスラッシュ雪崩と雪崩による大量山岳遭難事故」と題して、1972年3月20日、24人の犠牲者を出した登山史上に例のない富士山の大量遭難事件の発生状況や、その原因となった富士山における「雪代現象」について、映像を駆使して平易に解説された（次号詳細掲載予定）。

表層雪崩、全層雪崩のほかに「スラッシュ雪崩」と呼ばれる第3の雪崩現象の存在について説明したこの講演は80分に及んだが、聴衆の興味は尽きなかったようだ。

最後に「富士山大量遭難、その報道と波紋」を、元支部長で静岡新聞社OBの児平会員に語っていただいた。この遭難事件は、マスコミに「無謀登山」と非難され関係者は口を閉ざしてしまったが、昨年、静岡新聞に掲載されたスラッシュ雪崩に関する児平会員の記事を読んだ遺族から、「40年を経て、ようやく遭難の事実を理解できた」と手紙を受け取ったことが披露された。

引き続いて行なわれた懇親会は、24の円卓を囲み本部から森会長、尾上前会長ほか4名の役員にお越しいただいた。

各支部からの自慢の地酒の差し入れ、当支部からは酒造会社を経営されている照内、青島両永年会員から蔵出し吟醸酒の大盤振舞いがあり、会場は大いに盛り上がり、岐阜支部による横笛演奏は喧騒に紛れてしまった。

翌21日は穏やかな秋晴れとなり、笠雲を頂いた優美な富士山が姿を現した。今回の支部懇談会のテーマは富士山であったから、晴天を祈る思いでこの日を迎えたが、不安定な天気が続くなか、この日だけ晴れるという幸運に恵まれた。しかも、前日に富士山は初冠雪というおまけがついた。

Aコース（110名）は富士宮口五合目より御殿庭に出て巨大な宝永火口を眺め、安間元支部長の解説を聞き、双子山経由で御殿場口へ、一人の落伍者も出さず全員が無事に下山した。

またBコース（38名）は、高鉢駐車場より西臼塚まで、富士山南麓に広がるブナ、ナラの自然林を散策。

Cコース（22名）は、日本平、国宝久能山東照宮、そして昨年6月に富士山文化遺産に指定された三保の松原などを巡った。

遠路、本大会に参加していただいた会員には心より感謝申し上げます。また、当方の不手際で弁当の配布や駐車場への引率、Aコースの静岡駅の帰着時間の遅れなど、ご迷惑をおかけしたことをお詫びします。来年は中部ブロックの懇親会を静岡支部で主催します。よろしければまたお出かけください。

また、静岡支部会員の約半数60余名が、この日のために役割を担い一体となって活躍してくれました。この場を借りて、静岡支部の皆様にも改めて感謝申し上げます。

Students

第50回学生部マラソン大会

学生部委員長　杉原一樹

第50回の記念大会として開催

11月9日㈯、平成25年度第50回日本山岳会YOUTH CLUB学生部マラソン大会が開催された。本大会は毎年、皇居外苑の周回コースを使用して開催しており、4人1組で1人5キロメートルを走る駅伝方式の団体戦と、1人15キロメートルを走る個人戦がある。

50回目の記念大会ということで、今まで学生部に参加していなかった大学や地方の大学にも広く案内した結果、例年を大幅に上回る18団体123人の出場となった。今年から新たに学生部に参加した団体や、東海学生山岳連盟からも多くの学生が出場してくれた。

男子個人戦のスタート

また、今まで簡素なものだった大会要綱や申し込み用紙は、きちんとした形式のものを作成し、表彰式もセレモニー会場を借りて行なった。協賛企業の皆様からも、賞品として例年以上に豪華な品を提供していただいた。結果として50回記念大会にふさわしい、盛大な大会にすることができた。

学生部のあり方とは
―マラソン大会を通じて―

大学山岳部、WV部の衰退が進む今、身内だけでは岩登りや冬山登山が行なえない団体も多い。このまま衰退が進めば、優秀なクライマーを輩出する下地が失われてしまう。学生部の役割は、そのような団体がより活発に活動できるよう講習会を開催したり、団体同士の交流を促す行事を企画することである。

大学山岳部、WV部にとって、団体交流は非常に重要である。他のスポーツと異なり、山を登る行為は「他者と競う」ことが基本的には存在しないため、山岳部、WV部は身内だけの活動になりがちである。他を知らなければ自分たちのレベルもわからないし、刺激を受ける機会もない。そもそも活動が低迷している団体は、他との交流がないところが多く、自らアクションを起こしにくいものだ。

そのような団体に継続的に学生部の活動に参加してもらうきっかけとしても、マラソン大会や、昨年度から開催しているクライミング大会への参加を広く呼びかけることは重要な意味を持つ。

以上の背景から、今年は普段、学生部に参加していない関東の団体や地方の大学山岳部、WV部などにも案内を発送した。発送先を調べていると、学生部では今まで把握していなかった団体を、いくつも見つけることができた。これらの団体には、今後ぜひとも学生部の活動に参加してもらいたい。今回のマラソン大会が、そのきっかけとなれば幸いである。

団体戦スタート前に記念撮影

上位入賞者の記録

◆男子団体戦（駅伝方式1人5キロメートル×4人）
1位　早稲田大学山岳部Aチーム（73分44秒）
2位　明治大学山岳部Aチーム（74分24秒）
3位　武蔵野大学山岳部Aチーム（75分41秒）

◆女子団体戦（駅伝方式1人5キロメートル×4人）
1位　武蔵野大学山岳部Cチーム（106分38秒）

※女子の団体戦は1チームのみ参加。

◆男子個人戦（15キロメートル）
1位　丹澤俊・中央大学山岳部（54分46秒）
2位　萩原鼓十郎・早稲田大学山岳部（55分10秒）
3位　黒河輝信・早稲田大学山岳部（55分30秒）

◆女子個人戦（15キロメートル）
1位　渡辺葉月・東京農業大学山岳部（76分59秒）
2位　太田奈津季・明治大学山岳部（77分52秒）
3位　江花みのり・東京農業大学山岳部（80分32秒）

Information

「山の日」制定運動が正念場
拡大新組織で祝日実現へ

「山の日」制定プロジェクト　成川隆顕

「山の日」づくり運動で、昨年11月にあった2つの大きな動きをご報告したい。

ひとつは、すでに新聞やテレビでご存じかと思うが、超党派の国会議員連盟が国民祝日としての「山の日」を8月11日と決め、1月国会に議案を提出する運びとなったこと。日本山岳会など山岳5団体が提案していた「6月第1日曜日」ではなく、8月のお盆前に設定されたことについて事情を説明し、会員各位のご理解を得たい。

次に、「山の日」制定を国民運動として展開するため、新しい拡大組織として『全国「山の日」制定協議会』が活動を始めたことである。5年前に「山の日」を提唱し運動を積み上げてきた当会には、この先、新組織の実働、中核団体として大きな役割が期待されている。

祝日「山の日」は8月11日
超党派議連が議案提出へ

超党派の「山の日」制定議員連盟（衛藤征士郎会長）がスタートしたのは昨年の4月である。議員連盟は毎週のように総会（勉強会）を開き、森林資源、環境、安全、観光など多面的なアプローチで関係省庁の担当者からヒアリングを行なった。祝日を1日増やすことの是非を考えるため、年間休日、労働時間の国際比較にも踏み込んだ。8月には長野の上高地で、また9月には大分の九重山麓でブロック集会を開き、地元関係者の生の声を聞いた。13回に及ぶ議連の総会には、山岳5団体の代表もオブザーバーとして欠かさず出席し、求めに応じて意見を述べた。

衛藤会長らは、当初から2014年1月の通常国会に祝日法の改正案を出そうと考えていたようだ。議連は10月に入って「山の日」にふさわしい時期、日にちの特定を議題にした。

山岳5団体はかねてから提案していた「6月第1日曜日」を推した。夏山シーズンを前に「山々が緑に輝き、各地で山開きが行なわれて……」など「山の恵みに感謝し、山との深いかかわりを皆で考えるのにもっともふさわしい日」として提案した。含みとして「海の日」がそうであったように、翌月曜日が休日になり、6月に連休ができることを考えていた。

山の日制定議員連盟・衛藤会長

6月初旬のほかにもいくつか候補があった。「みどりの日」や「海の日」との関連でも選択肢があった。しかし、残ったのは8月と6月のどちらを選ぶか、だった。

衛藤会長らが特に配慮したのは「祝日増によるマイナスを極力避けたい」の一点だった。これ以上の休日増は経済活動を損なう、中小企業の負担が増える、学校教育にも影響する、などの意見に対する配慮である。結果、議連としては6月初旬より8月のお盆休みにつなげて設定することでマイナス要素が減り、法案成立の可能性が高まる、という判断が優先された。

当初の「8月12日案」は、御巣鷹山の墜落事故の日と重なると異議が出て再検討することになり、11月22日の総会で、1日繰り上げて8月11日と決まった。「夏山シーズン、家族で山に親しみ、国民全体が有効利用できる日」だとコメントしている。議連では1月の通常国会に祝日法改正案を上提する準備を進めた。超党派議連の案件とは言え、議案が審議され成立するかどうかは、政権の方針や国会情勢に大きく影響されるので楽観は許されない。

全国「山の日」制定協議会発足
各界代表が組織強化で始動

全国「山の日」制定協議会を構成しているのは、日本山岳会など山岳5団体のほか、国会議員、地方自治体の首長、経済界の賛同者、有識者らである。11月11日、東京・麹町の弘済会館で行なわれた設立総会で、会長に谷垣禎一氏（当会会員、日本山岳ガイド協会会長、衆議院議員）が選ばれ、副会長の一人として尾上昇氏（当会前会長、評議員）が就任した（役員は後述）。

全国協議会はその会則で、《「山

の日」を制定し国民祝日とすること》を目的とする任意団体、と規定している。当面150の法人・団体、200人以上の個人会員獲得を目指している。年間9百万円の事業予算は、法人・団体から一口3万円、個人から同5千円の会費で賄うことになる。

その資金で何をやるのか。当面は広く国民の理解を得るための各種事業、特に周知のための集会やイベントの開催に力を注ぐとしている。県や市町村など地方自治体から、祝日制定の意見書を国会宛に出してもらう。各地域、各団体の行事などすべてをネットワーク化して情報交換し、国民運動として盛り上げる。メディアに働きかける。インターネットを駆使して運動をアピールする……などである。

「山の日」制定協議会を作り3年半にわたって活動を続けてきた山岳5団体は、この全国協議会の中核的存在であり、それぞれの組織が持っている特徴を十二分に発揮することが求められている。百余年の伝統があり、優れた人材と32の支部を擁する公益社団法人日本山岳会への期待は大きい。

日本山岳会での今後の行動

日本山岳会は、YOUTH CLUBの活動などにより、若い会員も増えているが、会全体としての平均年齢は依然として高いのが実情である。しかし、周りを見渡して60歳以上75歳くらいまで、比較的元気がいいクラブではないか。豊富な経験をもとに山登りの効用を説き、周辺の人たちを誘ってそれなりの山登りを楽しむ。スピードとテクニックに代って安全と経験を武器に、身の丈に合った登山に参加する。環境保全や森づくりもよし。自然探索が趣味の方も多いはずである。女性会員の活動にも大きく期待したい。

全国「山の日」制定協議会の設立総会（弘済会館）

「山の日」づくりは、グループや組織の活性化につながるチャンスでもある。支部活性化の一環としてこの運動への取り組みを強化、拡大してほしい。自治体や他のグループ、あるいは地元企業や新聞、テレビなどと連携して、講演会や観察会、展示会などのイベントを企画する。パワフルで実績がある支部がいくつもある。支部間交流を深めて参考にしてほしい。

私たち「山の日」制定プロジェクトにも、ノウハウやコンテンツを提供する用意がある。

こうした超党派議連の動きと、国民運動としての全国「山の日」制定協議会の活動は、いわば車の両輪である。連携しながら運動を前進させ、幅広い各位の参加を得て「山の日」の実現を期したい。

健康的かつ文化的な気概を以て山に親しみ、山を尊び、登山への関心を高め、美しく豊かな自然を次世代へ引き継ごう――日本山岳会の設立当初からの理念を思い起こしてほしい。国民の祝日「山の日」の制定は、より多くの人々が山と向き合い、山に誘うきっかけとなるに違いない。

個人会員加入のお願い

全国「山の日」制定協議会の個人会員になっていただける有志を募集しています。日本山岳会はすでに法人として加入していますが（12月理事会で決定）、個人会員についてもできるだけ多くの方に加入していただければ幸いです。

詳しくは日本山岳ガイド協会内の事務局にお問い合わせください。

Fax：03（3358）9780
E-mail：baba@jfmga.com

全国「山の日」制定協議会役員

会長：谷垣禎一
副会長：衛藤征士郎（会長代行、衆院議員）、安藤宏基（日清食品ホールディングス社長）、尾上昇、国島芳明（高山市長）、福田富一（栃木県知事）、藤原忠彦（長野・川上村長）、松沢哲郎（京大霊長類研究所教授）
監査役：梶正彦（タタ・コンサルタンシー・サービシズ・ジャパン相談役）
事務局長：磯野剛太（日本山岳ガイド協会理事長）

Information

日本山岳協会・東京都山岳連盟との新たな関係について

会長　森　武昭

標記の件につきましては、9月の理事会で協議し、それを受けて9月27日開催の評議員懇談会での意見聴取を経まして、10月の理事会で正式決定しました。そして、10月22日に日本山岳協会（以下「日山協」と略）と協議し、理解が得られましたので、その内容を以下に報告します。

1・歴史的経緯

日本山岳会は、今年で創立109年になります。設立にあたってはイギリス山岳会の影響を受け、純然たるクラブ組織の性格を有していました。しかし戦後になって、国体の開催など行政の流れを汲む機能も求められるようになりました。そこで1955年ごろから組織の再編成が検討され、60年に行政的な機能を担う組織として、各都道府県の山岳連盟で構成される「日山協」が発足し、日本山岳会は当初の理念どおりにクラブイズムに徹することになりました。

しかし、ここで問題となったのが、海外登山申請と外貨の割り当てという行政上の手続きを行なうことや、指定寄付の特典を受けるためには、日本山岳協会の傘下に入らなければならないという点でありました。そこで本部が東京都にあったため、日本山岳会は東京都山岳連盟（以下「都岳連」と略）に加入することになり、今日に至っています。

なお、指定寄付の特典を受けるためには、日山協とその上部団体の日本体育協会に、寄付額に応じて所定の手数料を払うことになっていました。

2・公益社団法人への移行に伴って関係が変化

財団・社団法人に関する法改正により、上記3団体とも公益社団法人を選択することになりました。そして、2012年4月に日本山岳会、13年4月に日山協と都岳連がそれぞれ公益社団法人として新たなスタートを切りました。当会としても新たな情況に対応するため、日山協と都岳連との関係を見直す件について常務理事会で検討を始めたところに、日山協から新たな提案が持ち込まれました。すなわち、昨年の2月27日に日山協の内藤副会長（当時）と尾形専務理事兼事務局長から当会の尾上会長（当時）に面談の上で、日山協では47の都道府県山岳連盟に加えて当会や公益社団法人全国高等学校体育連盟の加盟も認められるように定款変更したので、当会もぜひ加盟してほしいとの要請がありました。狙いとしては、将来的に日本の登山界を一体化し、国際的にも分かりやすい体制を構築したいということでありました。また、当会が加盟している都岳連については、情況が大きく変わったので退会しても問題ないとの見解が示されました。

この提案を受けて尾上会長は、慎重審議が必要と判断し、次期執行部に対応を委ねることとしました。

3・現執行部の対応

6月15日に発足した現理事会では、日本の登山界全体の現状を踏まえつつ、この提案に対する当会としての対応を検討し、日山協への回答案を作成し、冒頭に記載した手続きに入りました。その内容は、以下のとおりです。

①当会として、日山協からの提案をこのままで纏めるのは難しいという見解である。特に会の性質（理念や生い立ち）が異なっているものを一体化するのには、無理がある。

②日本山岳会としては、日山協といっそう連携を密にして協議を重ね、共通の課題に協力して取り組んでいくこととしたい。また、課題によっては勤労者山岳連盟、日本山岳ガイド協会などの他団体とも連携して取り組む必要があると思う。この方法は、すでに山の日制定や自然保護に関して実績もあげている。

③公益法人に移行したことによる社会状況の変化に伴い、当会としては都岳連を退会することにしたいと思っている。

4・第1回の連絡会（仮称）

上記回答を踏まえて日山協でも審議し、当会の考え方に理解が示

されました。そこで11月19日に、八木原副会長と尾形専務理事が当会を訪れ、今後の方針を協議しました。その結果、最初に両団体の保険に関する情報交換、遭難防止・安全対策などを課題とすることになり、担当者レベルで協議することを確認しました。

またこの席で、日本山岳会の各支部と都道府県山岳連盟との関係も話し合いました。この両者の関係の疎密は支部によって大きく異なっているのが現状です。支部が各岳連に加盟するかどうかは、当然、支部の判断事項となりますが、できるだけ情報交換などを通して協力関係を構築していくことは、双方にとって有益であることを確認しました。

この第1回の連絡会（仮称）の結果を受けて、私が都岳連の佐藤会長（日山協副会長兼務）に電話で当方の意向を伝えましたところ、理解が得られましたので、今年度末をもって退会することを文書で提出しました。

5・まとめ

上記のような経緯を踏まえて、当会としては、日山協・都岳連との新たな協力関係を構築し、日本の登山界が抱える諸問題にあたっていきたいと思っています。そのためには、当会としても双方の協議が充実した内容となるように、積極的に取り組んでいく所存であります。会員各位のご理解とご支援をお願いいたします。

Report

第45回　新入会員オリエンテーション開催

総務委員会　大塚幸美

昨年10月26日、第45回新入会員オリエンテーションが開催された。

今回の対象者は、会員番号15185～15385番の196名で、そのうち参加は28名。内訳は東京多摩支部から6名、埼玉支部から1名、千葉支部から1名、四国支部から1名、および首都圏から19名。特に若い方の参加が多かった。

森会長や各理事、委員らから日本山岳会を紹介

13時半、オリエンテーションは、今田総務委員長の司会進行によって高原総務担当常務理事の挨拶から始まり、続いて森会長が歓迎の言葉を述べた。

森会長は、日本山岳会の輝かしい歴史、図書室や資料室など貴重な資料を有していることを紹介。さらに講演会、文化活動、そして支部や委員会、同好会などで積極的に活動してほしいと挨拶した。

続いて、総務担当の佐藤常務理事より会組織と活動全般の説明が行なわれた。さらに藤田総務委員が山岳傷害保険の案内をした後、休憩をはさんで柴山山研委員長から上高地山岳研究所の利用について、さらにYOUTH　CLUBをはじめ9つの委員会と6つの同好会の活動紹介があった。

森会長を囲んで記念撮影

続いて、新入会員から1人3分間の自己紹介と意見交換が行なわれた。今年も様々な職歴、山歴の方々が入会し、なかには高校の山岳部からスタートして50年もの経験を持つ方や、遠く沖縄県から参加された方もいた。

その後、森会長を囲み記念撮影をしたが、台風の影響で例年とは違って会議室での撮影となった。

親睦を深めた懇親会

17時過ぎから、場所を会議室に移して懇親会が始まった。森会長の挨拶と乾杯の音頭、司会は岡田総務委員が担当。新入会員からの差し入れが次々に披露され、さらには委員会、同好会の勧誘合戦に会議室は大盛り上がりで、参加者は大いに親睦を深めたようであった。

18時半、オリエンテーションおよび懇親会は、大盛況のうちに幕を閉じた。

今回の参加者は、関東地方の会員が多かった。地方会員の参加が難しい現状に鑑、今後の開催形式を考慮する必要がありそうだ。

西北 東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

岡野金次郎と顕彰碑――日本山岳会創立の導火線となった先駆者

砂田定夫

湘南平の一角に、レリーフとして顕彰されている岡野金次郎の表情は、いかにも庶民的な親しみやすい笑顔で、富士や箱根の山を眺めている。日本山岳会の創立を鉄道に例えれば、最初にレールを敷いたのは岡野であり、機関車を走らせたのが、後に初代会長を務めた小島烏水(本名久太)であったと思う。

明治7(1874)年、保土ヶ谷に生まれた岡野は苦学し、機会を得て世界中を航海したのち、石油会社に定職を得る。21歳で徴兵検査を受けるが不合格となる。そのとき、同じように不合格となった烏水と出会う。そして、親密な交友関係になった2人は、明治35(1902)年、槍ヶ岳登頂という日本人による近代登山史上の画期的記録を残した。

その後、偶然、岡野がウォルター・ウェストンの著書を見つけ、同じ横浜に在住する著者の所在地を探し当て単身面談に至る。これがきっかけで、烏水を含めた3人の交友が始まった。ウェストンの熱心な勧めもあって山岳会創立の気運が高まる。しかし、山岳会(のちに日本山岳会)創立発起人の中に岡野の名はない。それは岡野が、次第に名士扱いされていくことを拒み、表面に出ることを避け、山岳会から身を引いて在野の道を選んだからと思われる。

岡野は、丹沢はじめ近郊の山へ足しげく出かける一方、全国の山にも登った。さらにその足跡は、当時統治下にあった樺太、満州、朝鮮など広域の山にまで及んだ。また、富士山を愛し、112回も訪れたという。几帳面に記していた日記は震災で焼失し、それ以前の記録は残されていない。日課の散歩、日記、俳句などで終生悠々自適の生活を送った。烏水との交友も一時不和の期間もあったが、和解して訪宅面談することもあり、文通は終生続いた。

転居の多い人生で、最後は平塚に安住の地を得たが、昭和33(1958)年、交通事故に遭い84歳の生涯を閉じた。盟友烏水が没してちょうど10年目であった。筆者が山に入れ込み始めた年でもあり、忘れられない年である。

その3年後、家族は本人の意思に反すると固辞したが、結局、平塚市議会や関係者の熱意で顕彰碑が建立された。

俳句

西山秀夫

奥黒部彷徨

水脈(みお)細く花野に至る黒部川
黒部川溯るべく登高す
初秋や柳絮舞ひ落つ奥黒部
八月の未だ雪解く黒部川
深淵の底まで見へて水澄めり
鷲羽岳に立つ早朝の肌寒し
澄む秋の槍穂高焼御岳も
黒部川虫を落とせば岩魚食ふ
（薬師沢小屋）
遙々と秋野の果ての登山小屋
（三俣山荘）

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

千葉支部

公開シンポジウム「富士山と房総の自然を語る集い」

昨年12月7日、公開シンポジウム（日本自然保護協会、東京湾学会など後援）を千葉市の県立中央博物館で開催した。日本一高い富士山の世界文化遺産登録を記念し、都道府県の最高標高が408メートルと最も低い千葉県と富士山との関わりを考えようと企画、同博物館が共催した支部の公益事業で、県民ら約80人が参加した。

三木副支部長が「千葉は山なし県だが、房総半島の分水嶺を踏査して東京湾越しに見える富士山は美しく、照葉樹林の北限に近いのも富士山と共通している。今日はたくさん話を聞いてください」と主催者を代表して挨拶。日本自然保護協会理事、元東京大学教授で日本山岳会員の大澤雅彦さんが「世界の植生からみた房総と富士山、そしてヒマラヤの自然」と題して基調講演した。大澤さんは「房総半島は世界でもまれな日本海溝のプレート三重会合点にあり、地震が頻発する。日本列島を二分するフォッサマグナに位置する富士山は伊豆大島とともに房総半島に対峙する火山帯を構成し、同時に房総と富士山は熱帯と温帯の境界で共通する生物相を持ち、文化的にもアジア亜熱帯へと連なり、中国南部、ヒマラヤへとつながっている」とスケールの大きな興味深い話をされた。

好評であった公開シンポジウム

また、同博物館地学研究科主任上席研究員の高橋直樹さんが「千葉県の地質・地形と富士山」、さらに副館長の中村俊彦さんも「富士山の浮世絵から探る房総の景相」をテーマに映像を交えて話した。

参加者との討論では、「世界が広がった。ダイナミックな自然と人間の関わりが面白かった」「房総と富士山との関わりや、房総とヒマラヤが植物相や文化でつながっていることがわかり、雄大なロマンを感じた」などの声もたくさん聞かれた。

（三木雄三）

東九州支部

第12回青少年体験登山大会

昨年9月22日、好天に恵まれ参加者は76名と過去最多となった。登山の行程は、九重連山の牧ノ戸峠から久住山頂を往復するルートとし、自己申告のもと3つの班に分けた。「健脚組」は九州本土最高峰の中岳まで足を延ばし、「げんき組」は途中で星生山を経由、「のんびり組」は直接ルートで、3つの班が久住山山頂で合流という設定である。

9時過ぎに健脚組から順に出発、12時過ぎには参加者全員が山頂まで登り着いた。山頂には万歳や歓声があふれ、登頂を喜び合った。15時30分ごろ、全員元気に牧ノ戸峠に降り着いた。初めて山登りをしたという小学生や中高年などの初心者が多かった。参加者からは「とても良い経験になった」「天気も良くすばらしい山登りができた」「来年も実施してほしい」などの声が聞かれた。

（飯田勝之）

久住山をバックに

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

資料映像委員会

第17回全国山岳博物館等連絡会議を開催

昨年11月9日㈯13時から17時まで当会集会室にて開催。7館から8名の参加があった

参加館は富山県［立山博物館］（富山）、富山県立山カルデラ砂防博物館（富山）、市立大町山岳博物館（長野）、松本市山と自然博物館（長野）、谷川岳山岳資料館（群馬）、東京都写真美術館（東京）、北区飛鳥山博物館（東京）。日本山岳会からは勝山理事、荒井委員長、石田、川嶋、多田、斉藤、奈良、中野、鈴木各委員が出席した。

会議の冒頭に荒井委員長より、公益法人化になり当会議が公益事業であること、活発な情報交換をお願いしたいとの挨拶があった。続いて各館から本年度の活動と課題等について報告があり、熱心な意見や情報交換がなされた。次に各館のトピックスを紹介する。

富山県［立山博物館］：山岳集古未来館がオープンした。開館記念企画展を開催。

立山カルデラ砂防博物館：常設展示「立山ガイドコーナー」を設置した。氷河調査は池ノ谷右股雪渓などを調査中。

市立大町山岳博物館：展示替え、耐震工事等で13年11月5日から14年3月28日まで閉館する。資料の再整理を計画中。

松本市山と自然博物館：入場者は4万人。アルプス公園周辺のガイドブックを作成（有料）。

谷川岳山岳資料館：矢島保次郎展を開催。来年は「谷川岳の氷河地形」展を計画中。

北区飛鳥山博物館：開館15周年。企画展「浮世絵にみる北区の江戸時代」を開催。

東京都写真美術館：公益財団法人東京都歴史文化財団の紹介、改修工事のため14年10月から15ヵ月間休館。黒部と槍「冠松次郎と穂苅三寿雄」の企画展準備中。

また、資料の燻蒸、蔵書目録作成についても意見交換した。今後もこの会議が情報交換の場として発展するよう、委員会として取り組んでいきたい。

（鈴木敬吾）

会議では活発な情報交換が行なわれた

緑爽会

シンポジウム　私に2本のバラを持たせて下さい――高橋健治とローゼ夫人の生涯――

昨年10月25日18時からJAC集会室で標記のシンポジウムが開催された。初めに主催者から健治がその基礎を作った京大学士山岳会と、妻ローゼの薫陶を受けたモア・ジョイ会が、一緒になって2人の生涯を語ってほしい旨の挨拶。そのあと司会をAACK会員でもある芳賀孝郎元副会長に委ねた。

斎藤清明氏（AACK）

今西・西堀と並んで三高（京大）三羽烏と言われ、ともに劔岳チンネ北壁初登をした高橋健治は、また渡欧中にガイドレスでマッターホルンに登り、シュナイダー学校でスキー術を学んで帰国。湯沢や小谷などでスキーの指導をした。笹ヶ峰の京大ヒュッテ建設にあたっては、献身的に働いた。京大樺太探検の帰途、ドイツ娘のローゼ・レッサと出会い結婚するが、結核のために戦後間もなく死去。ローゼは以後50年、モア・ジョイ会を主宰してけなげに生きた。

坪井靖子氏（モア・ジョイ会）

高校生のときにローゼ先生に英会話を習いに行き、以後93歳で亡くなるまで弟子であり、友人であり、秘書的なことも務めた。ローゼは第1次大戦後、東洋の未知の国に憧れて来日する。民俗学に興

Climbing&Medicine・60

スポーツドクター受診のお勧め

浜口欣一

俗に「医者を選ぶのも寿命の内」と言いますが、山登りをする人が身体に支障が生じたらどうしたらよいでしょうか。スポーツをしないドクターを受診すれば、「山登りは禁止、またはほどほどに」と言われかねません。山登りを趣味とする方にとっては先が暗くなるばかりです。膝が痛い、腰が痛いということで普通の整形外科を受診すれば、原因の一つとなる「山登り」は止めるように忠告されるでしょう。しかし、山登りを趣味とする筆者の先輩整形外科医、長尾先生や大森先生に相談し、それなりのアドバイスをいただき、その後山登りを楽しんでいる日本山岳会会員が多いことでしょう。ここにスポーツドクター（日本体育協会、日本整形外科学会、日本医師会の各認定コースの修了者に与えられる名称。アスリートからスポーツ愛好者のスポーツによる障害を治療する医師）の存在意義があると思います。

筆者はある日突然に目の前が真っ暗になったのをきっかけに、循環器のスポーツドクターである内科医の診察を受けました。検査の結果、早朝高血圧、労作性狭心症という診断で、シグマート（冠動脈拡張）、バイアスピリン（血液サラサラ）、ブロブレス（血圧低下）、リピトール（コレステロール低下）を処方されました。先生の診察を受けて思い当たる節がいくつかありました。登山初日の最初の１ピッチは、胸が苦しく、思うような行動ができなかったこと。自己診断で、「これが狭心症か」と思っていました。シグマートは心臓を養っている冠状動脈を拡張させる作用があり、副作用として頭の血管も拡張させ頭痛が生じます。しかし、筆者は安全に楽しく、仲間に心配をかけずに山行を続けたいと思い、前述の内科医に相談して、服薬の仕方を工夫しました。つまり、１日３回の服用を１回とし、3000m級の登山の場合には入山３日前から１日３回服用というようにしました。服用開始４年間ぐらいは入山日に胸に違和感を生じていましたが、いつの間にかその症状はなくなっていました。最近の検査では特に異常な点は指摘されていません。冠状動脈の狭窄部位周辺にバイパスができたものと考えられます。最近は最初の１ピッチ後の同行者の挨拶が「大丈夫ですか？」から、「調子が良さそうですね」に変わりました。循環器のスポーツドクターを受診しなければ、「登山は禁止」ということになっていたでしょう。

医療委員会には各方面の専門家がおります。登山にあたって身体的なご相談がある方はご連絡ください。お役に立てればと考えております。

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会

http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html

盛況であったシンポジウム

味を持ち、北海道のアイヌ集落を訪れた帰り、青函連絡船の中でドイツ語で話しかけてきた健治と親しくなる。結婚後は登山やスキーに同行して、雪国に暮らす人々に感動する。健治の死後は高橋家を出て上京。法政付属高や大学で語学講師を務める傍ら、モア・ジョイ会を設立。海外との交流を深めると同時に、働きながら留学する若者への道を拓いた。私もその一人。モア・ジョイのモットーは、「与えることは生きること」。ローゼの生涯はまさにその実践だった。

吉田理一氏（越後支部）

平成14年緑爽会支援「フォーラムin小谷」のとき、山田旅館に山崎宗城さん（モア・ジョイ会会長）と坪井さんが見えて、ローゼさんが『北越雪譜』の英訳・独訳をした話をされた。私の勤務先のすぐ近くに「鈴木牧之記念館」があり、そこでローゼ・レッサ訳の独語版・英語版の『北越雪譜』があるのを見て、研究してみようと思った。彼女は昭和11年に健治とともに湯沢の高半を訪れた際、出たばかりの岩波文庫『北越雪譜』を贈られている。私は健治の死後ライフワークとして英訳・独訳を完成させたことに感動したのだが、今日はローゼさんの全体像を知ることができて良かった。

その後、司会から健治とともにスキーの指導をした福岡高儔さんが99歳で健在なことを紹介。代りに出席した長男の高昭さんからメッセージとアルバムの抜粋が映し出されて、会場を沸かせた。

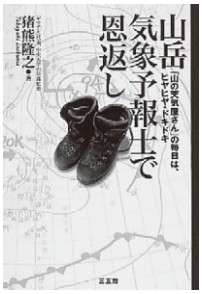
参加者約50名。悪天候の中、予想を遥かに超える盛況であった。なお、後日談としてJAC図書室に欠けていた『北越雪譜』独語版が坪井靖子氏から寄贈されたことも付記しておきたい。

（近藤　緑）

図書紹介

山岳気象予報士で恩返し――「山の天気屋さん」の毎日は、ヒヤヒヤ・ドキドキ

猪熊隆之・著



2013年11月
三五館刊
四六判 240㌻
定価 1575円

NHK「世界の名峰グレートサミッツ」や、日本テレビ「世界の果てまでイッテQ！」の登山隊サポート、ユニークな山の天気講座などで注目されている猪熊隆之さんが、この本の著者である。

私は「世界の名峰グレートサミッツ」が好きで、テレビの録画予約をしていつも観ている。そして、いつも思うことがあった。「こんな絶景はどのように撮影しているのだろう」と。本書は、こんな私の疑問にも答えてくれる。

撮影のための気象予測の難しさ、頼れる天気予報はどのようにして生まれるのか。80歳の三浦雄一郎のエベレスト登頂や、日本人として初めて8000㍍峰14座登頂の快挙を陰で支えた山岳気象予報とは……そんなあれこれを山岳気象士のエキスパートが書き下ろしたのが本書である。そこには普通の山登りでは知り得ない、驚きや新鮮さがあふれている。

そのほかにも富士登山での注意、気象遭難、山の歩き方なども書かれていて、登山初心者からベテランまで読み応えのある内容となっている。後半には落ちこぼれだった少年時代、大学山岳部での変貌、骨髄炎闘病の話、著者が設立した株式会社ヤマテンのことなど、まさに山あり谷ありのエピソードが綴られている。

本書から感じることは、いつも挑戦を続ける著者の精神がすごいということ。読み終えて、挑戦が苦手な自分を振り返り反省するきっかけができた。私も何か一つ挑戦してみよう、自分の新しい道を見つけることができるかもしれない、そんな気がしている。

（瀬尾亜希子）

『新版　松浦武四郎自伝』

笹木義友・編

2013年7月
北海道出版企画センター発行
A5版　355㌻
定価　3990円

本書は松浦武四郎の自伝として、内容が最も良く原本の形を伝えていると考えられる。雑誌『世界』（京華日報社）に16回（明治44年～大正2年）にわたって連載したものを底本としている。

松浦武四郎（1818～88）は三重県三雲村で出生、幼名は竹四郎。10歳ごろから諸国遍歴の志を抱き、1832年に一人で江戸へ、翌年から本州、四国、九州の名跡、山岳などを巡り、多くの旅日記を遺す。富士山へは18歳で登り、2度目は没年前の70歳である。

蝦夷地へ渡ったのは45年で知床岬まで、翌年は樺太。49年には国後島、択捉島を探検している。

55年に幕府御雇を命ぜられ、2年後に東西蝦夷山川地理取調御用となり、その年は西蝦夷地天塩まで、翌年は残りの土地について主要河川を遡り、内陸部の情況を詳細に調べ『東西蝦夷山川地理取調日誌』85巻、『東西蝦夷山川地理取調図』28枚を著した。2年後に御用を辞し著作に没頭、『蝦夷紀行』24巻など数多くの著作を刊行している。

明治元年に新政府が誕生すると東京府付属、翌年は開拓判官に任ぜられ、北海道名、国郡名の選定などを行なった。アイヌ民族の介護など政府の方針は武四郎の志に沿わず、翌年辞任した。

本書を「山岳図書」として推す理由は、武四郎は全国の山々を行脚しているからである。膨大な著作・手控・書簡などは、横山建堂、吉田武三、高倉新一郎、秋葉實の諸氏によって翻訳・解説がなされ出版されているが、それらを読み解くのは困難であろう。

それで本書は簡潔に読み取れる手引書なのである。文化15年から慶応3年までの自伝、日記である。

見開き頁の左上には年月、下段の脚注には関連事項を太文字で記し、本文中の地名は現在の地名を併記しているのでわかりやすい。

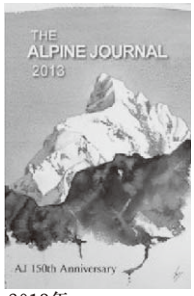
巻末には3千人を超える人名索引があり、特にカタカナ書きのアイヌ名が多く興味深い。

前出の富士山の本文記事は「甲州にて金峰山、奈良田、七面、身延山を過富士岳に到り、郡内に到りて八王子、川越を過、七月上旬江戸に到る」。下段の脚注は富士岳富士山　武四郎登山とある。

武四郎の登山に関する著書は、同社から2007年7月に渡辺隆著『江戸明治の百名山を行く――登山の先駆者松浦武四郎――』（定価1200円）が出版されているので、併読すると理解が深まる。

（高澤光雄）

Stephen Goodwin・編『Alpine Journal 2013』



2013年
The Alpine Club発行
A5変形判 456ページ
定価 £26

英国山岳会の機関誌で、当誌は発行150年記念号であるとともにエベレスト初登頂60年記念号でもある。また、ヒマラヤニスト二代目の娘さんが二人寄稿するなど内容は豊富だ。以下に内容を紹介する。

アジアの高地：英国隊が12年夏、6400メートルのキャンプを出発して未踏のマゼノ稜から14日かけてナンガ・パルバットの初登攀に成功（13年ピオレドール賞受賞）した記録や、ポーランド隊の冬季GIなどの登攀報告がある。

エベレスト初登頂から60年：13年には年間で630余名が登頂した。5月16日にヌプツェ、19日にエベレスト、そして21日にローツェと3つの巨峰を連続で登頂した登山隊など、依然としてエベレストの魅力を物語っている。初登頂時に生理学者として参加したGriffith Pughの娘・H.Tuckeyがハント隊長の1次隊と2次隊の酸素器具の採用の巧拙などを再評価している。

探査：未踏の西ネパールの探査、中村保氏の四川の未踏峰踏査など魅力的だ。

寒冷地：南米最南端・フェゴ島ダーウィン山脈の完全横断、南極での7峰の初登頂も興味深い。

150年記念随筆：初刊号に掲載されたイタリア北東部Monte Disgraziaの初登頂記事をフォローし、その後150年の動向など登山史としても面白い。

文化と科学：Kurt Diemberger の娘でチベット研究家・Hildegardによる景観変化の考察、地質学から見たヒマラヤ隆起理論、マナスルの雪崩事故分析など参考にしてほしい。

地域別情報：アルプス、パキスタン、ペルー、アルゼンチン、南極など、ネパールではキャシャール南ピラー初登攀、インドではザンスカールでのJAC学生部など邦人の活動情報が目を惹く。しかし、中国の情報は皆無だ。また、エベレスト基金の支援を受けた20余の登山と結果報告があるが、日本隊は見当たらない。利用できるはずだ。

書評：30冊の書籍の中に中村保氏の『最後の辺境　チベットのアルプス』が紹介されているが、キャプションだけが英語のため、英語版の発行が待たれているとある。

そのほかに歴史、追悼、委員会報告、催し、収集絵画などがある。

（南井英弘）

図書受入報告（2013年12月）

編著者	書名	ページ／サイズ	発行元	刊行年	寄贈／購入別
木曽駒ケ岳遭難裁判の記録刊行会（編著）	都立航空高専 木曽駒ケ岳遭難裁判の記録	509p/22cm	れんが書房新社	1993	川嶋新太郎氏寄贈
九州高等学校（編）	由布岳	177p/21cm	海鳥社	2013	加藤英彦氏寄贈
メスナー（著）スラニー京子（訳）	極限への挑戦者：ラインホルト・メスナー	319p/21cm	東京新聞	2013	出版社寄贈
一等三角点研究会（編著）	登山案内（続）一等三角点全国ガイド	191p/21cm	ナカニシヤ出版	2013	編著者寄贈
上村信太郎	知られざる富士山：秘話 逸話 不思議な話	255p/19cm	山と溪谷社	2014	出版社寄贈
Kielkowski, Jan	Shisha Pangma Mountains：Monographi - Guide - Chronicle	163p/21cm	Explo	2013	著者寄贈
Hinkes, Alan	8000 Meters Alan Hinkes：Climbing the World's Highest Mountains	192p/27cm	Cicerone Press	2013	中村保氏寄贈
Ridkosil, Tomas	Bohemian Paradise Geopark	120p/33cm	Geopark	2011	中村保氏寄贈
Bordella, Matteo Della	Book Ragni 2012	/31cm	Ragni di Lecco	2012	中村保氏寄贈

会務報告

平成25年度第8回(12月度)理事会議事録

日時　平成25年12月11日㈬19時～21時
場所　日本山岳会集会室
【出席者】森会長、節田・黒川・古野各副会長、高原・吉川・佐藤各常務理事、大槻・落合・勝山・川瀬・直江・野口・山賀・山田各理事、吉永監事
【欠席者】浜崎監事

【審議事項】

1・全国「山の日」制定協議会への団体加入について(森)

全国「山の日」制定協議会（会長谷垣禎一）が設立され、当会に団体会員として加入要請があり応じることとする。なお、会費は3口（1口3万円）9万円を支払うこととする。（承認）

2・寄付の申込みについて(吉川)

独立行政法人青少年育成機構および公益社団法人国土緑化推進機構から寄付の申し出について事前申請があり、それに応諾したい。（承認）

3・入会希望者について(高原)

11名の入会希望者があった。（承認）

【協議事項】

1・当会主催山行に係わる登山計画書等の提出について(川瀬)

標記について、遭難対策委員会が作成した別添資料に基づき協議し、さらに検討することとした。

2・委員会規程改正について(高原)

当会の目的に沿った委員会活動に資するため、委員会の業務内容案が提示された。その案について各委員会で検討し、平成26年2月度の理事会に提案することとした。

【報告事項】

1・各PT・WGから現在までの検討状況・進捗状況について報告があった。

(1) 110周年記念事業(佐藤)
海外登山について集中的に検討しているとの報告があった。

(2) 山の日制定PT(山賀)
超党派国会議員連盟が8月11日を国民祝日「山の日」とするため、次期通常国会に祝日法改正法案を上提する準備を進めていること、全国「山の日」制定協議会において個人会員を募集していることについて報告があった。

(3) 収益事業・会員サービス検討PT(節田)
三百名山の編集進捗状況について報告があった（平成26年5月末発刊予定）。

2・平成26年度事業計画と予算について(高原)

今後のスケジュールについて説明があった。

3・寄付の受入について(吉川)

寄付金の受入5件および寄付金の事前申請6件について別添資料により報告があった。

4・税額控除法人としてのまとめについて(吉川)

税額控除適用法人の税額控除に関する仕組み、旅費等の自己負担額を日本山岳会に寄付する場合の取り扱い等について別添資料により説明があった。

5・日本山岳協会との打合せについて(森)

10月度理事会での審議結果に基づき、11月19日、日本山岳協会と今後の協力態勢について話し合った。それらの経緯は、別添に示す内容で会報「山」1月号で報告する予定である(8ページ参照)。

6・都岳連退会届について(高原)

10月度理事会での審議結果に基

づき、本年度限りで退会する旨、届を提出した。

7・110周年記念企画における海外遠征隊および募集型海外山行についての留意点について別添資料により説明があった。（黒川）

8・冬山天気予報について（古野）

JAC冬山天気予報（北アルプス北部・北アルプス南部・八ヶ岳）を12月19日～1月18日の間、配信することとした。

9・支部長会議について（高原）

12月7日に開催した支部長会議の概要について報告があった。

10・平成25年度年次晩餐会について（高原）

12月7日開催の平成25年度年次晩餐会は、会員約460名が参加し盛況であったとの報告があった。

11・北区飛鳥山博物館からの冠松次郎に係る資料借用等の依頼があり承諾した。（高原）

12・土田幸雄会員（越後支部）からの会報「山」231号の記事転載願いがあり承諾した。（高原）

13・㈱日展からの志賀重昂に係る図書等の使用申請があり承諾した。（高原）

14・会報「山」12月号の発行について報告があった（節田）

【今後の予定】

1・支部事務局会議　平成26年1月25日㈯～26日㈰

2・海外登山基金助成登山計画締切　平成25年12月31日

3・日本山岳協会　平成26年新春懇談会　平成26年1月18日㈯13時～

1989年に創設された海外登山助成基金では、20年以上のあいだに30チーム以上に助成されてきた。写真は、2012年のパタゴニア（横山勝丘、花谷泰広）のもの。今回募集した2013年度後期については、今月中に審査が終わる。

ルーム日誌 12月

2日　総務委員会　会報編集委員会
3日　図書委員会　スケッチクラブ
4日　総務委員会　常務理事会
集会委員会　YOUTH CLUB
5日　総務委員会
6日　総務委員会　九五会
9日　総務委員会　スキークラブ
高尾の森づくりの会
10日　山岳研究所運営委員会　スケッチクラブ
11日　図書委員会　理事会　休山会
12日　フォトビデオクラブ　山の自然学研究会　山岳地理クラブ
13日　海外委員会
16日　二火会　資料映像委員会
17日　遭難対策委員会　支部活性化PT　スキークラブ
18日　三水会　青年部　つくも会
19日　休山会　科学委員会
20日　集会委員会
24日　YOUTH CLUB
25日　フォトビデオクラブ　自然保護委員会　麗山会　山遊会
26日　01会

12月来室者　420名

会員異動（12月分）

物故

阪下悦子（9013）　13・11・30
井上希夫（11321）13・12・14

退会

大田俊一（14702）
齋藤嘉嗣（13507）千葉

INFORMATION

インフォメーション

◆講演会のお知らせ『アルプ』とその時代

東京多摩支部

昨年10月に山と溪谷社から『アルプの時代』が出版された。かつての名だたる文人、詩人、岳人（武田久吉、田部重治、冠松次郎、尾崎喜八、深田久弥、串田孫一、辻まこと）などが寄稿している、その山岳文芸誌『アルプ』の創刊時から編集に携わった山口耀久氏による回顧録である。

今なお日本の山岳文化の歴史の中に燦然と輝きを放つ『アルプ』。この度の出版を記念し、創刊から終刊までの25年間を振り返り、その「時代」を語っていただきます。

また、会場で同書の頒布やサイン会も行ないます。

日時　26年2月25日㈫18時30～20時30分
講師　山口耀久氏
会場　立川市女性総合センター5階　第3学習室
定員　80名
費用　500円
申込　岡田陽子
TEL 090（4059）6967
✉yokookada@jcom.home.ne.jp

◆第23回「山好きの山の絵展」開催

アルパインスケッチクラブ

60人の会員が実際に登り、見た山々を描いた作品、水彩・油彩・版画など70点とスケッチブックを展示する。

日時　2月16日㈰～2月22日㈯10時～19時（初日は12時から、最終日は17時まで）
会場　有楽町　東京交通会館2階ギャラリー
TEL 03（3215）7962

＊同時開催：5人の会員による「エメラルド5人展」（同ビル地下1階　エメラルドルームにて）

『団体登山保険』募集案内

平成26年3月31日から開始の団体登山保険募集期間は**平成26年1月14日～2月10日**です。加入希望の方は、下の代理店宛に申込書類を請求ください。

なお、すでに加入の皆様には、継続確認の書類が送付されます。また、保険期間途中での加入もできます。

資料請求先：（株）東海日動パートナーズ東東京
担当　藤田　礼子
TEL　０３－５６３７－１６１１
FAX　０３－５６３７－１６１２

日本山岳会所蔵資料紹介 No.9

［資産番号］　10081 ～ 10160
［資 料 名］　茨木猪之吉
［部 門 名］　絵画
［寄 贈 者］　横山駒子
［受 入 日］　2000年10月11日

画帳32冊

茨木猪之吉（1888 ～ 1944）の画帳（鉛筆描き）32冊と絵画（油彩）42点が寄贈されている。画帳・絵画とも、そのほとんどは未発表・未公開の一級資料である。今号では、画帳より数点を紹介する。

茨木は、山を闊歩しながら麓の山村、風俗や風物、人物を描き続けた。⑥⑦⑧のように日記や絵手紙風に描かれているものも多数あり、自身の一代記のようでもある。また⑩は、『山岳』六年２号の表紙になっていることから、下書きであったと思われる。

茨木が生前に出版した唯一の画文集『山旅の素描』（茨木猪之吉・著/1940年刊/三省堂/164頁）がある。この「序」で田部重治は次のように述べている。画を見る上で参考にしていただきたい。「氏の絵には、何人にも真似ることの出来ない野趣があり、特に、山と人生との入り組んでいる方面の描写に於て優れているように思われる。山を背景とした山村や街道の風貌、山を背景とせる寂れた裾野の人家人間など氏に最もふさわしい題材ではなかろうかと思われる……氏の旅先から貰ったスケッチ風の叙述や報告には愛誦すべきものが多い」。

①秋草

②針の木小屋番　細川氏

③針の木小屋

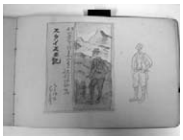
④焼山にて

⑤涸沢行

⑥焼岳の噴火口より

⑦軽井沢にて

⑧旅の若山牧水　牧水朗吟


⑨スウイス日記

⑩山岳六年2号

⑪木暮会長

⑫無題

⑬するが岩淵旅行

なお、日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→資料映像委員会→所蔵資料紹介のページへアクセスすると、「会報ページそのもの」を拡大して見ることができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください。✉jacshiryo102@jac.or.jp　**（資料映像委員会）**

❖編集後記❖

●編集スタッフの奈良千佐子さんが、今月号で引退。２００５年２月から係わっているというので、９年に及ぶ。現在、奈良さんの担当は、後半のページ。委員会、支部の活動報告や会員からの投稿、図書紹介、会務報告など。「日本山岳会所蔵資料紹介」などの連載も担当。会報編集は商業誌とは性質が異なる。会員の顔が見えて、会員と話ができて初めてできるもの。そこには細やかな配慮や思慮深い判断も必要。その意味においても、貴重な方がお辞めになることが、私自身もとても辛い。長い間、お疲れ様でございました。ありがとうございました。来月号から新体制になります。本年もよろしくお願いいたします。

（柏 澄子）

日本山岳会会報　山　824号

2013年（平成26年）1月20日発行
発行所　公益社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261-4433
FAX　東京(03)3261-4441
発行者　日本山岳会会長　森 武昭
編集人　柏 澄子
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社